



独立行政法人 国立病院機構

四国こどもとおとなの
医療センター

アートプロジェクト



—今月のショット—

四国こどもとおとなの医療センターの石碑
ひめゆり平和祈念資料館



2016年 11月号

—院内の小さな声から—

当院の南側庭園には旧香川小児病から移設した石碑があります。沖縄から帰ってきて、あの石碑に書かれていることを改めて思い出しました。陸軍病院だった当院は多くの傷痍軍人を受入れていたのですが石碑には「戦時中といえども人の心を癒すことはとても大切なことである。傷痍軍人のために職員から寄付を集め病院とは別に棟娯楽施設を建設した。」という内容が刻まれています。大切な人が病に倒れることはただでさえつらいことなのに、人が人を傷つける戦争。その戦争で負った傷を治療する医療スタッフはどんなにつらくやりきれない想いを抱えていたことでしょうか。傷ついた身体は簡単には治りません。でも、心の傷は時代を超えて刻まれるもっと深いものなのです。この石碑は沖縄でみた青い花と同じ役割を果たしているのかもしれない。時をこえて。静かに。



今月の一枚

作家名：山田 祐志
作品名：君からの手紙

—沖縄と青い花—

11月11日、12日、第70回国立病院総合医学会が沖縄で開催されました。今回のテーマは「医療構造の変化と国立病院機構に問われる役割」、サブテーマは「※命(ぬち)ぐすい、温かい医療を広げよう」でした。『命(ぬち)ぐすい』とは Okinawan language(島くとぅば)で、心が癒される出来事(親からの愛情、おいしい料理、おもてなしなど感銘を受けたことがらなど)の事象の総称をいうそうです。全国各地から集まった機構病院の職員が日頃の取り組みや研究成果を発表しました。当院からは68題が採択され、そのうちのひとつとして「アートを窓口にしたドネーション(寄付)の可能性」というテーマでボランティアさんの活動や、アートが関わることでより医療現場の求めるかたちの寄付や助成金が受けられる可能性について発表しました。学会の合間に「ひめゆり平和祈念資料館」を訪れました。ここでは国内唯一の住民を巻き込んだ地上戦である沖縄戦がどんなものだったか。元ひめゆり学徒生の体験を通して戦争の実体が伝えられています。沖縄戦で沖縄陸軍病院に動員された女子学生たちの総称を、戦後「ひめゆり学徒隊」と呼ぶようになったそうです。病院壕(沖縄陸軍病院)がどんな場所だったのか、そこで彼女達がどんな活動をしていたのかを知りました。彼女達は当時の教育(軍国主義、皇民化教育)に従い、凄まじい状況の中でも、懸命に傷ついた兵士の看護をしました。しかし戦況は悪化し解散命令が出され、米軍が包囲する戦場に放り出されることとなります。私はこの資料館で教育と政治と医療の抱えてきた闇の深さに触れた気がしました。いたたまれない気持ちで資料館を出ると、どこからともなく良い香りがして藤棚に青い花が揺れていました。ここに青い花を植えた人を想いました。

コンセプトの中の「待つ」という言葉、又想いは、私自身の絵画制作の原点であります。もう手のとどかない所へ行ってしまった人に合える日を「待つ」、その手のとどかない場所へ、いつか自分も行ける日を「待つ」、というメッセージと言いますか、イメージがあって、絵を描いています。そういう感情のかたまりみたいなものが、今回の絵をうみだしました。広い草原の中にあるイスは、いつかそこに座ってくれる日を、「待つ」という意見で、自分自身を投影させたものであると感じています。